

細川家のローマ字印文書二種
 — 熊本の歴史資料(二) —

大島 明秀

はじめに
 架蔵資料に細川忠興のローマ字印が捺された通行手形と、その息子忠利のローマ字印が捺された発給文書の断簡が存在する。既に『細川侯五代逸話集』で紹介したところであるが、以下、これらについて改めて見ていきたい。

一、細川忠興発給ローマ字印文書

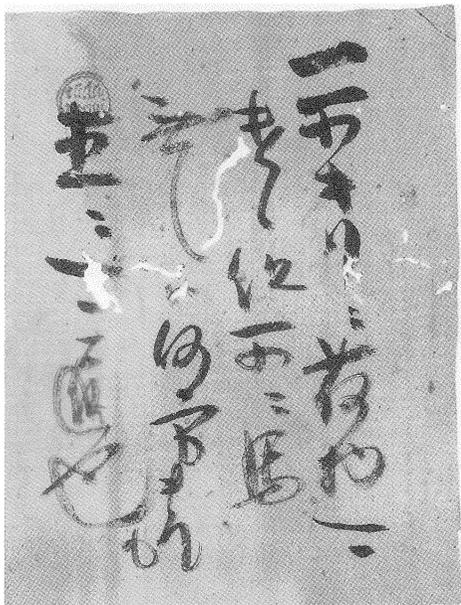


図1-1
 細川忠興発給通行手形（架蔵）

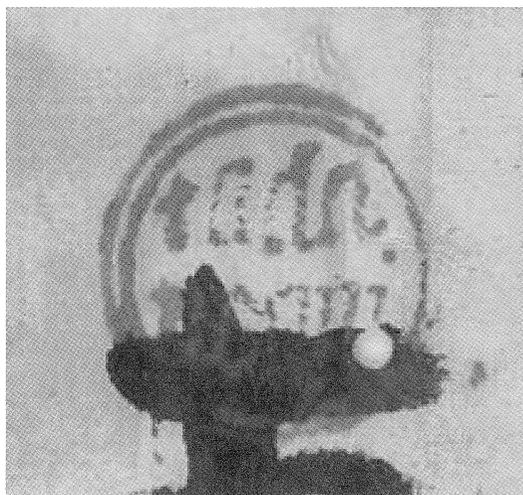


図1-2
 忠興ローマ字朱印の拡大図

図1-1は一二・二一×一〇・二糶の一紙文書であり、その筆跡から細川忠興の肉筆に成る文書と認められる。釈文は以下のとおりである。

一所キリニ荷物可ノ遣候但所ニ馬ノ無之ハ何方までも
 ノ直ニ可通也

内容からこの文書がいわゆる通行手形であることが分かる。ここで注目したいのは、左上方に捺印された直径一・〇糶のローマ字印（円、朱、陽）で、印記は「Tadauqui」（タダオ「ヲ」キ）とある。オ「ヲ」を「no」、

キを「qui」と記すのは、『日葡辞書』(Vocabulário da Língua de Iapam, 1603-04) 等で頻繁に確認できるイエズス会式の表記法であり、当該朱印の印記はこの方式に基づいて作成したものである。



図2-1 ブランクス『日本図』に見られる九州

ところで、忠興とイエズス会の関係という妻ガラシャの存在がただちに想起されるが、ここで留意したいのは、その中津領内における弾圧時期である。と言うのは、慶長五年(一六〇〇)にグレゴリオ・デ・セスペデス神父(Grégoire de Cespedes)は黒田官兵衛支配時代に創設された中津教会に居を定めたが、同年中津城に入城した忠興は、既にガラシャが没していたものの当面は幕府の意に沿うことはなく、一六一一年のセスペデスの死去まで中津領内のキリシタン弾圧を行うことはなかった。ここに、当時の忠興とイエズス会の関係性の一端が窺えよう。

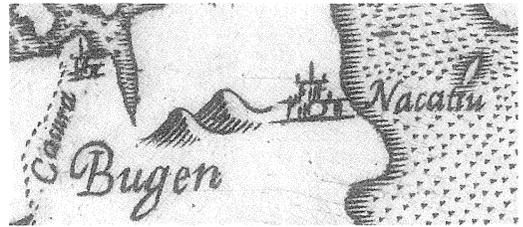


図2-2 「Nacatu」周辺の拡大図

二、細川忠利発給ローマ字印文書

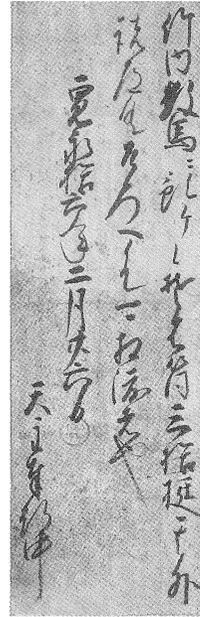


図3-1 天主奉行宛細川忠利発給文書
(断簡、架蔵)

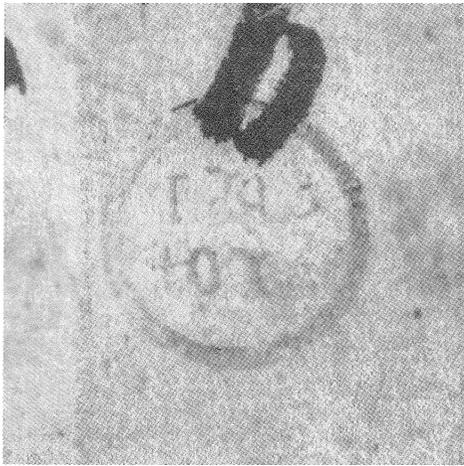


図3-2 忠利ローマ字朱印の拡大図

図3-1は二九・九×九・五糶の忠利発給文書であるが、大部分が欠損し、その末尾部分のみが残存した断簡であることは明らかである。よって内容の全体像は不明ながらも、発給年次が寛永一六年（一六三九）二月二六日であること、宛所が天主奉行であることが分かる。確認できる部分の積文は以下のとおりである。

竹内数馬ニ預ケ候そは筒三拾挺其外ノ諸道具そろへ候て可相渡者也ノ寛永拾六年二月廿六日ノ天主奉行中

当該文書にも年次の下に直径一・五×一・五糶のローマ字印（円、青、陽）が認められ、印記は「tadashi」（タダトシ）とあり、ここでもシは「xi」で表され、イエズス会の表記法に拠っていることが分かる。年記の寛永一六年がカトリックに対して厳しい対処がなされていた時期であったことを考えると、この印が用いられた背景については興味がそそられるところである。



図4 写本「阿部茶事談」内題（架蔵）

さて、文書に登場する竹内数馬は、森鷗外「阿部一族」の中で、忠利の児小姓をつとめた後、新藩主光尚から阿部一族に対する討手を命じられ、最後は討ち死にする人物である。「阿部茶事談」は鷗外「阿部一族」の種本で、近世後期頃に、まずは「阿部茶事談」が創作され³、さらにその「阿部茶事談」を用いて歴史小説「阿部一族」が執筆された。ただし、「阿部茶事談」は史実を題材とした歴史物語であるものの、その内容が虚構であることが山本博文によって論証されている⁴。

おわりに

見てきたように、架蔵資料の細川家の二つのローマ字印文書をめぐって、翻刻を行いつつその周辺について記してきた。忠興のローマ字印文書は、イエズス会との関係性を想起させるものであり、一方、忠利発給文書の断簡は、寛永一六年時点におけるイエズス会に対する忠利の眼差しや、さらには史実と物語の間にまで思いを馳せさせる史料である。

1

ミヒエル・ヴォルフガングは、イエズス会士が中津に居住していたことを示す絵図史料としてクリストフォロス・ブランクス (Christophorus Blancus) 『日本図』(一六一七刊)を指摘した。この『日本図』の情報源はイエズス会の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano) と共に来日したイグナシオ・モレイラ神父 (Ignacio Moreira) の記録に基づいたものであった。「中津が記された最古の西洋図」(ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀(共編)『中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書』第一三巻、中津市教育委員会、二〇一四年)、八〇―八二頁。なお、『日本図』に Jason C.

Hubbard: *Japonia insulae : the mapping of Japan : historical introduction and cartobibliography of European printed maps of Japan to 1800*. Hes & de Graaf Publishers, 2012, pp. 167-170. ただし、ここに掲載した二図はミヒエル論文からの転載。

2
中津では、黒田官兵衛支配となった天正一五年（一五八七）、山口からペドロ・ゴメス神父（Pedro Gómez）を招き、三月二〇日（西暦四月二七日）には復活祭が行われ、その際、官兵衛の嫡男長政、府内城主大友義統、そして最後の岐部城主岐部左近太夫一辰らは洗礼を受けた。また、この年の六〜七月頃に忠興・室玉（ガラシヤ）も洗礼を受けた。前掲ミヒエル・ヴォルフガング「中津が記された最古の西洋図」、八二頁。

3
「阿部茶事談」については、藤本千鶴子「阿部一族」殉死事件の真相と『阿部茶事談』の資料的性格」（『熊本史学』第四四号、一九七四年）以降もいくつかの写本が発見されていることから、現存写本を徹底追究して校訂し、物語の原型を確定する必要がある。

4
山本博文『殉死の構造』（弘文堂、一九九四年）。